

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 畑作物

発行日 平成26年 9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ **大豆** 生育の早いところでは葉の黄化・落葉が始まっていますので、圃場観察をこまめに行い、適期に収穫できるよう準備をすすめましょう。施設を利用して乾燥調製を行う場合は、あらかじめ連絡を取り合い、計画的に作業できるようにしましょう。また、台風の動向に注意し、収穫作業に支障が出ないよう排水対策を行いましょ。
- ◆ **小麦** 小麦の播種適期となっています。適期を逃さず確実に作業を行い、生育量の確保に努めましょう。圃場条件が整わず適期を逃した圃場では、播種量を増やし、目標株立数の確保に努めましょう。

大豆

1 生育の状況

生育の早いところから黄化、落葉が始まっており、10月上旬以降に収穫適期になると見込まれます。落葉や成熟の状況は、圃場によってかなりバラツキが見られます。このため、圃場をよく観察して、刈り遅れないように準備を進めましょう。

8月中下旬の曇天・多雨で、べと病や黒根腐等が発生している圃場が一部に見られます。次年度の発生源を除去するため、汚損粒防止のため、病害に侵されている株や、極端に黄化が早い、あるいは青立ちしているといった株は抜き取りましょう。

今年度は全体に大豆の生育が旺盛で、倒伏している圃場が目立ちます。刈高さなどを圃場毎に綿密に調整して、収穫ロス低減と汚損粒の防止を図りましょう。

2 収穫作業のまえに

(1) 台風対策

この時期は台風が発生しやすいので、気象情報を確認し状況に応じて排水対策、施設の保守点検など、事前事後対策を徹底してください。技術内容の詳細については、H26.9.22発行の「号外 台風対策」を参照してください。

(2) 除草

アメリカセンダングサ、シロザなどの大型雑草は、収穫時に汚損粒の発生原因となるので、収穫前に取り除きましょう。

(3) コンバインの清掃・調整

収穫作業の前には必ず清掃点検を実施し、作業に支障が出ないか確認しておきましょう。

また、土をかみ込んだ時など収穫作業中でもコンバインの清掃が必要となることがあるので、清掃のポイントを把握し、効率的に行えるようにしておきましょう。

倒伏した大豆を収穫する場合、リフターと呼ばれるオプション部品をコンバインに装着することにより収穫ロスが低減できることがあります。

(4) 乾燥・調製施設の確認

乾燥・調製施設を利用する場合には、その稼働計画について確認し、圃場の様子を踏まえた上で、刈り取りの順番、収穫機械やオペレーターの確保等、準備をすすめましょう。

3 収穫

(1) 成熟期の判断

適期に収穫するためには、まず成熟期を知ることが必要となります。

成熟期は次の2つから判断します。

ア 圃場のほとんどの株で、大部分の莢が熟色になっている

イ 莢の中の子実が乾燥子実の形になっている

莢を振ってカラカラ音がするようになったら、数カ所で実際に莢をむいて確認します。成熟期を確認したら、表1を参考に収穫作業に入ります。

表1 成熟期からコンバイン収穫適期までの日数

品種	成熟期からコンバイン収穫適期までの日数		
	早限	晩限	収穫(適)期間
コスズ、すずほのか	7～10日後	30日後	20～23日
ユキホマレ	7～10日後	20～25日後	10～18日
ナンブシロメ、スズカリ	10日後	20～25日後	10～15日
リュウホウ	10日後	20日後	10日
青丸くん	10日後	16日後	6日間前後

※刈遅れると「リュウホウ」はしわ粒が発生しやすくなり、「青丸くん」は子実の色抜けが生じることから、収穫適期間になったら速やかに収穫します。

※シュウリュウは成熟後、やや裂莢しやすいので収穫適期に達したら速やかに収穫しましょう。

(2) コンバイン収穫のポイント

ア 収穫時の茎水分は50%以下

茎水分が50%を超えると、こぎ胴で揉まれ、汚損粒の発生原因となります。茎水分50%以下の目安は、分枝が手でポキポキと折れるときです。このため、青立ちした株は必ず抜き取ってください。また、冠水や倒伏により莢に泥が付着したり、高温・乾燥により早くから落葉するなど、品質低下が懸念される場合は刈り分けを行いましょう。

イ 収穫時の子実水分は18%以下

収穫時の子実水分は、損傷粒の発生に大きく影響します。子実水分が20%以上と高すぎる場合は、つぶれ粒を主体とする損傷粒が多くなり、15%以下と低すぎる場合は、裂傷や割れ豆などの損傷粒が多くなる傾向があります。

ウ 収穫の時間帯は茎葉がよく乾いた頃

晴れた日の場合、午前10時過ぎ～午後5時頃までが目安です。

4 乾燥

(1) 乾燥

子実水分が高いものを急速に乾燥させると、裂皮粒やしわ粒発生の原因となります。子実水分を均一に低下させるよう、送風温度等に留意しましょう。

(2) 被害粒発生のしくみ

被害粒のうち、裂皮粒やしわ粒は、子実の充実不足等、成熟期までに生理的に起きるものもありますが、乾燥時にも発生することが知られています。土作り等で地力の維持に努めることや、乾燥時に急速な乾燥を避けることも必要です。また、亀甲じわは、子実形成から収穫期前後までの乾燥・吸湿の過程で、皮と子実の収縮・伸長の繰り返しが生じる原因でおきるため、刈り遅れは厳禁です。

5 その他

(1) 紫斑病対策

成熟期以降、刈取りが遅れると紫斑粒が増加することが知られています(表2)。このため紫斑粒を増加させないためにも適期収穫が重要です。

また、ビーンカッターや手刈りで収穫した場合、速やかに脱穀・乾燥を行いましょう。島立てやハウス乾燥中の刈り株も、朝露や湿気などにより紫斑粒が徐々に増加することが知られています(表2)。

表2 発病粒率に及ぼす収穫時期および乾燥方法の影響

調査時期	発病粒率(%)				
	圃場に 放置	収穫後の乾燥方法			
		圃場に 地干し	屋外宙 吊り	ガラス室 内床干し	ガラス室 内宙吊り
成熟期15日前	0.0	—	—	—	—
成熟期10日前	0.2	—	—	—	—
成熟期5日前	1.9	—	—	—	—
成熟期(10月10日)	23.5	—	—	—	—
成熟期5日後	41.3	39.2	34.6	28.5	29.1
成熟期10日後	57.6	48.5	37.5	30.1	28.7
成熟期15日後	69.7	53.6	37.9	31.7	29.3

(東北農業試験場研究報告81号(1990)を一部改写)

小麦

1 小麦の播種適期を迎えています

例年、播種が遅れ生育量が足りないまま越冬する小麦圃場が多く見受けられます。表3を参考に適期を逃さず作業を行い、生育量の確保に努めましょう。

ナンブコムギは、縞萎縮病に弱いため、例年縞萎縮病の発病が見られる圃場で作付けをすると、播種時期の気温が高いほど翌春の発病程度が高まり、減収します。このような圃場でやむを得ず連作をする場合には、適期内でできるだけ晩播とすることが被害軽減に有効です。しかし、適期を過ぎた晩播は根張りが劣り、湿害や干ばつ害を受けやすくなりますので注意して下さい。

表3 県内の地帯別播種適期

地帯	播種期(月・日)		適期日数 (日間)
	早限	晩限	
高標高地	9.15	9.25	11
県北部	9.15	9.30	16
県中部及び沿岸北部	9.20	10.5	16
県南部	9.25	10.20	26

2 もしも適期を逃したら・・・播種時期が遅れたときの考え方

- (1) 播種適期を守るのが基本ですが、圃場条件が良くない場合、無理に播種しても発芽不良になるだけですので、その場合は作業を見合わせましょう。
- (2) 適期が過ぎてしまった場合は、各地帯の播種晩限から1週間遅れるごとに10%播種量を増やし、目標株立数を確保できるよう努めましょう(表4)。

表4 品種別の播種量と目標株立数

品 種 名	播種量(kg/10a)		目標株立数 (株/m ²)	千粒重 (g)
	ドリル播	全面全層播		
ナンブコムギ	4~6	5~8	75~120	41
ネバリゴシ	6~8	8~10	130~170	37
ゆきちから	6~8	8~10	120~160	39
コユキコムギ	6~8	8~10	120~160	41
キタカミコムギ	6~8	8~10	115~150	42
ファイバースノウ (大麦)	6~8	8~10	130~170	38

注) 播種粒数に対して株立率を80%(全面全層播は64%)として求めた

3 排水対策を万全に

水稻の刈り取り後、小麦を作付けする圃場については地表水の速やかな排水を促すため、できるだけ早く額縁明渠を設置しましょう(→必ず排水路につなげて下さい)。

圃場内明渠は、播種後に実施することも可能です。十分な準備ができない場合、播種後の施工も想定しておきましょう。

次号は10月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日~11月15日は
秋の農作業安全月間です**

豊作を 無事故で迎える いわたの農業

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。